別冊 センターつうしん NO.73

こども教育文化

第7号

もくじ

わが「田尻さくら高校」　江草　重男…1
新しい教師へのねがい　高橋金三郎…7
こどもの詩・こどものことば　みやざきのりお…10
船越だより　佐々木　清…13
宮城の教育遺産 7　仲間　鈴木　道太…17

2013みやぎ教育のつどい「不登校分科会」提出レポートから

わが「田尻さくら高校」

江草重男

1、はじめに

田尻さくら高校は、多様な学習歴や進路意識を持つ生徒にフレキシブルに対応できる学びの場となる重要な役割を担う学校として、2008年（平成20年）に4月に開校された。

2、入学してくる生徒について

多くの全日制高校では受け入れてもらえないと思われる、以下のような状況の生徒が受験して来ている。

・不登校などにより調査書点が著しく劣る生徒
・学校生活でのルール違反や反社会的行動などがあった生徒
・学校での勉強が嫌いな生徒や学校での勉強が著しく不得意な生徒
・何らかの障害を持ち、様々な支援を必要とする生徒ではあるが、支援学校ではなく普通高校で学ぶことを希望して進学できるところを探して受験して来た生徒

また、進学できる高校が他にもあると思われるが、以下のような状況の生徒も本校を選んで受験して来ている。

・友人関係などで地元の学校への進学を希望しなかった生徒
・経済的な理由などで遠くの高校へは通えない生徒
・他の高校に進学したものの、その学校での学習や生活に馴染めなかった生徒

これらの受験生に対し本校の入試においては、開校時と現在とで若干の対応の差はあるものの、ほとんどの受験生を受け入れている。但し、受験生が定員に満たない状態であるにもかかわらず、他の定時制高校と同様に毎年若干の定数内不合格者を出している。

3、入学後の状況

入学前の状況と入学後の状況の関連性は個人差が大きく、いちがいには言えない。しかし極めて大雑把な傾向としては以下のような状況であると言える。

・学校生活でのルール違反や反社会的行動などがあった生徒や、同じような理由で他の高校が続かなかった生徒の場合は、本校に入学しても学校生活が続いていない状況が多い。
・他の学校からの編入学・転入学者については、それまでの生活が改善されず欠席が続き、

学習が継続せず退学してゆく例も多いが、環境の変化に伴い、伸び伸びと学業に励み、大学進学などの進路が拓けた例も多くある。

・　友人関係などの理由で地元の学校への進学を希望しなかった生徒の場合は、環境が改善される場合が多い。しかし入学後、良い友人関係が作られるとは限らない。

・　経済的な理由で遠くの高校には通えない生徒の場合は、学業に励んでいる例も多い。

・　何らかの障害を持ちながらも、支援学校ではなく普通高校である本校で学ぶことを希望して入学して来た生徒は、本校での学校生活はクリアできても、その後の進学や就職においてスムーズには進路が拓けない状況はある。

・　学校での勉強が嫌いな生徒や学校での勉強が著しく不得意な生徒の場合は、出席が続かない場合も多く、また、授業を休まず受けて単位が取れても、元々の基礎的な学力不足が克服されているとは言い難い状況がある。

・　不登校を経験した生徒については、最も個人差が大きい部分である。環境の変化に依って改善され、他とは異なる単位制のシステムに馴染めると、登校が継続して卒業につながるケースも多いが、一方で、入学後も不登校の状況が継続してしまう生徒も多い。

4、不登校生徒を中心とした事例報告

(1) 中学校で別室登校を続けた女子生徒は、地元の高校への進学にはためらいがあり、親の送迎などによりⅡ部に入学した。入学後も多くの友達ができた訳ではないが、環境の変化もあって寡黙ながらもまじめな学校生活を送り、順調に3年で卒業し、自宅から通える地元の企業に就職し、既に3年目を迎えている。高校に進学してからも中学時の先生との交流が続いており、気にかけてもらっていることが励みになっていたようである。

(2) 中学卒業後、大学進学を目指して私立高校に進学したが、学校の体制が合わず欠席が続いた男子生徒は、高校2年次より本校に編入学してきた。本校の単位制による履修システムが本人に合い、大学受験に向けた学習は個人指導を受けながら学習に励んだ。自分が自信を持って大学受験ができる学力はまだ身についていないと感じたため、卒業時の受験は諦めたが、現在予備校に通いながら学習に励んでおり、難易度の高い大学を目指して頑張っている。

(3) 中学1年の後半から不登校だった男子生徒は、本校入学後も半年程で不登校が始まり、いったん学校を休み出すと行きづらくなり、2年次の終わりまで学校を休み続けた。3年次より再び登校がはじまり、アルバイトと学業を両立させながら徐々に単位を修得できるようになった。はじめは無口な学校生活だったが、5年目を迎えた今年は不登校時とは見違えるような生き生きとした学校生活になり、卒業予定者として就職活動に励み、内定がもらえるよう頑張っている。

(4) 中学校では登校はするものの担任の先生としか話しができず別室登校だった女子生徒は、一般入試の受験の際に送られてきた車から降りることができず不受験となってしまった。しかし二次募集でなんとか受験し入学することができ、Ⅱ部に所属して、遠隔地からではあるが親の送迎と列車により頑張って通学した。福祉系の就職を目指して福祉の授業を選択する中で友達もでき、就職試験時などに過度に緊張することもあったが介護職への就職も決まり順調に卒業した。介護職は楽な仕事ではないが、職場では頑張って仕事に励んでいる。

(5) 中学卒業後地元の実業高校に進学したが、一緒に入学した友達が合わないと感じて数日で退学し、仙台の広域通信制に入学し直した女子生徒は、私学の高い学費が負担となり1年次修了で退学した。本校へはⅡ部に2年次から編入学し、福祉の資格取得を目指して福祉の授業を選択した。履修登録では午前から夕方までに及ぶ履修となったが頑張って資格をとって卒業することができ、卒業後は首都圏の病院に就職した。しかし仕事の面で活躍することができず半年で退職し、現在は地元での就職を目指して就活中である。

(6) 中学時は完全な不登校で、中学卒業後は自宅で引きこもっていた男子生徒は、他の生徒より

3年遅れて入学して来た。好きなギターの練習に打ち込みながら学業にも励み、順調に単位を修得し、音楽を通しての友達もでき、親の理解もあり本人の強い希望で、卒業後は東京の専門学校に進学した。経済的な理由もあり新聞配達をしながら音楽の勉強に取り組もうとしたが、早朝から夕方まで新聞配達で時間が取られ、音楽に取り組める時間が取れず、親も本人の健康面を心配して約一ヶ月で自宅に戻った。現在は、地元で演奏発表の場を持ちながら今後の進路を模索中である。

(7) 中学時は不登校で、ゲームセンターなどで時間をつぶすことの多かった男子生徒は、数少ない学校での友達が本校を受験するので、一緒に本校を志望した。近くに親が住んでいながら、家庭の事情で祖母に預けられて生活しているなど、家庭的に恵まれないところがあり、健康的な日々を過ごしているとは言えず、家庭に居場所がなくゲームセンターなどで知り合った社会人と一緒に居る時間が長い生活を送っている。しかし学校は休まず登校し順調に卒業を迎えようとしており、就職活動に取り組んでいる。

(8) 中学で不登校を経験した男子生徒は、欠席が多いことを理由に本校への受験を決めた。入学後は自治会活動などにも積極的に取り組み、明るく順調に過ごし不登校を感じさせない生活であった。卒業後は本人の希望で専門学校に進学したが、寮生活に馴染めず学校への通学は、行ったり行かなかったりの生活になってしまった。

(9) 中学時の欠席が100日を超えていた男子生徒は、地元でもあり本校を受験した。高校でも友達はできなかったが、学校は休まず3年で卒業した。卒業後は自分の希望で仙台の自動車整備の専門学校に進学したが、友人が居ないこともあり近況は掴めていない。

(10) 中学では友人関係のトラブルから欠席が200日近くなってしまった女子生徒は、欠席が多い調査書では田尻さくら高校受験しかないと指導されて本校を受験した。高校では友人関係のトラブルはなく、就職も順調に決めた。しかし入社した会社に馴染めず、他の新入社員と共に数ヶ月で退社し、現在は縁故で就職してパートとして勤務している。

(11) 中学での欠席が150日近くになる女子生徒は、本校入学後も友人関係などでのトラブルなどが絶えず、単位の修得が進まないまま4年目を迎えている。現在も卒業が危ぶまれる状況のため、調査書の発行が認められず、就職活動もできない状況である。

(12) 中学での欠席が400日近くになる女子生徒は、本校入学後2年目から欠席が多くなり、現在4年目を迎えている。体力的な弱さから、授業を頑張って受けようとするものの、一週間程度続けると疲れが出てしばらく休むというような生活で、今年度の卒業はできなくなってしまった。現在は今後の進路を相談中であるが、来年度は授業料徴収もあるため、退学の可能性が高い。

5、その他のさまざまな事例報告

(13) 在学中からアルバイトで家庭の生活を支え、父親の借金を返済することがわたしの夢、と言って卒業した女子生徒がいた。在学中は、就労可能と思われるがほとんど働かない父親に代わりアルバイトの収入で生活費を工面し、卒業後は、就職して得ている給料の半分を親に渡している。

(14) 繊細で優しい性格が故に、進学体制の全日制高校に馴染めず中退してしまった男子生徒は、翌年、過卒で本校に入学し、本校では明るく元気に高校生活を過ごした。しかし就職活動がうまく行かず、現在は自宅からパート就労を断続的に行っている。フルタイム就労は自分には無理なのではないか、という思いから抜けることができないようである。

(15) 中学卒業後、地元の全日制高校に進学した男子生徒は、地元での友人関係から離れたい思いもあって2年次の途中で退学した。その後1年遅れで本校2年に編入学し、その後は本校のシステムに馴染んで好きな科目を中心に学習に取り組み、卒業後は首都圏の私立大学に進学し、現在は充実した大学生活を送っている。

(16) 本校在学中は極めてまじめに学習に励み、仙台市内の大学へ進学した女子生徒は、繊細な性

格と体力的な弱さから遠距離の通学が続かなくなり、仙台市内にアパートを借りての通学を始めたが、慣れない一人暮らしと学業の難しさから通学できなくなり、体調を崩して2年目の途中から大学を休学した。現在は、通院をしながらの自宅での療養生活で、徐々に健康を回復しつつある。

(17) 本校在学中の進路ガイダンスや学校説明会などで、大学からの勧誘に親子共々心を動かされ、遠隔地の薬学部へ進学した女子生徒は、高校在学中から進学に向けての勉強に取り組んだが、元々の学力不足を補うことができず、学業が続かず退学してしまった。現在は自宅に戻ってきているようであるが、詳細は不明である。

(18) 経済的な理由で就職希望に変更した男子生徒は、自宅から通勤できる地元の会社に就職した。順調に生活を送っていたが、自分の財布から約一ヶ月分の給料に相当する額のお金がなくなっていることに気づいた。本人の推測では身内の者の行為が疑われるが、口に出せずに終わってしまった。就職して約半年経ち疲れのたまってきた時期でもあったので、一時は会社も続けて欠勤するなど本人の精神的な落ち込みは大きかった。

(19) 金遣いの荒い親から離れたいと願い、自宅を出てひとり暮らしで通う就職先を選んだ女子生徒は、給料日も、給料の額も、貯蓄をしていることも一切親には話していない。しかし、それでも車で親が訪ねて来て「タバコ代をくれ」と無心するので、お金ではやらず、タバコ屋に行ってタバコを買って渡している。

(20) 経済的な理由から進学を諦め就職し、進学のための貯金を始めた男子生徒は、数ヶ月でいくらかの貯金を貯めることができた。しかし家族から「トラブルに巻き込まれたから、その解決のためにまとまったお金が必要だ」と言われ、自分の貯金の提供が強要されてしまった。「トラブル解決のため」との理由の真偽は定かではない。

(21) 母子家庭で、幼少期を育児放棄から施設に預けられた女子生徒は中学でも欠席が１００日近くになるなど苦労して過ごし、母親に甘えたい思いを強く感じさせる言動がみられる。現在は母娘の関係は良好と思われるが、卒業後は家を出て就職するよう母親から言われ仙台市内への就職を決めた。生徒自身の言葉に依れば、母親が再婚するのに娘が一緒にいるのは歓迎されないとの事情があるようだ。

(22) 祖母の家から通う女子生徒は首都圏で生まれ、両親の離婚で兄と共に父親に引き取られたものの、父親は体調不良で病死してしまった。実の母親は首都圏で新しい家庭を持っており、子どもを引き取ることはできなかったため、やむなく宮城県の父方の祖母の元で育てられた。しかし、祖母はあまり孫の子育てに誠意はなく、兄は苦労しながらも自立して地元で働いているが、学費の負担を渋る祖母に代わり、滞納する校納金などを兄が補うこともしばしばあった。落ち着いて学業に励める状況ではなく祖母の意向もあり、高校を退学して他の親戚がいる関東地方に転居し働きに出ることとなった。

6、学校紹介資料

本校を理解していただくため、さまざまな状況を以下の通りまとめる。

①　田尻さくら高校の開設の経緯

宮城県内の定時制高校の再編の一貫として、県の北部地区に作られた多部制単位制高校。それまで全日制高校として約60年の歴史を持つ田尻高校を廃校にして開校され、今年で開校6年目を迎え、これまで3回の卒業生を出した。入学定員はⅠ部・Ⅱ部で１２０名であるが、入学生が定員に達したことはなく、過去3回の卒業生も毎年60名程度である。

②　多部制単位制とは

多部制とは、授業時間をいくつかの時間帯に設定してそれぞれの部に分けて生徒募集を行う形であるが、他の部の授業も受けることができるように運用している。

単位制とは、定められた必履修科目を履修し、自由選択科目及び総合的な学習の時間と合わせて74単位以上を修得して3カ年以上の高校在籍に

拠って高校を卒業する制度である。学年制と異なりクラス単位での授業はなく、留年や落第の概念もない。

③　授業時間帯について

田尻さくら高校の授業は45分授業で行われ、1校時から10校時まであり、1校時の始まりが8時45分、10校時の終わりは午後7時である。1校時から4校時がⅠ部の授業時間、7校時から10校時がⅡ部の授業時間とし、5・6校時を併修の授業時間と称しているが、3卒を基本にしている学校なので、6校時終了時に掃除と諸連絡のための（SHRのような）時間をⅠ部・Ⅱ部共通で設定している。

④　定時制の3卒とは

定時制は本来、一日4時間の授業を受け、4年間で卒業するシステムである。しかし、1988年からの高校での単位制導入に伴い、学校の授業以外の英検や漢検、数検、簿記検定、大検（高卒認定試験）などの様々な検定合格を単位に認定する制度が導入されるようになり、また一方では全日制から、既に沢山の修得単位を持った生徒が定時制に編入学や転入学する状況があるなかで、『既に3年で卒業できる状況の生徒に対しては3年での卒業を認めても良いのではないか』との見地から、定時制での3卒が制度化された。多部制高校では所属する部以外の時間帯の授業も受けることで1日6時間前後の授業を受けることを可能にして、3年で卒業できるシステムが運用されており、本校では原則として3卒を前提とした履修指導が行われている。

⑤　教員の体制

単位制で一定数以上の科目を開設している学校には、教員定数に加配があるが、基本は全日制と同じ定数である。本校では全ての授業で少人数指導を行っているので、先生方の授業時間は多くなり、週当たりの持ち時数は全日制並に14～16時間となっている。

田尻さくら高校では、クラスという概念のないシステムで、クラスの代わりに10～20数名毎に班を作り、チューターという名称の教員を担当者として置いている。クラス担任が責任を持ってクラスの生徒の指導に当たるという従来の概念から離れ、生徒は自己責任で学校生活を送り、学校に来ること、授業を受けること、試験を受けて合格する点数を取ることなど、すべてが生徒自身の自己責任で行うことを基本とし、生徒は誰の先生の所に相談に行っても良いという考え方でこのシステムが作られた。このシステムは、担任の先生との折り合いがうまく行かず不登校になってしまう生徒が居ることに対する対策であるが、現実には自己責任で学校生活を送れる生徒は極めて限られており、チューターがいわゆる従来の担任の仕事と同様に、担当する生徒への指導や家庭への連絡などを緊密に行わざる得ない状況で、それらの連絡や指導のなかで、チューターと上手く折り合えない生徒がストレスを感じたり不満を持ったりする状況はある。

⑥　教員の勤務時間について

田尻さくら高校の教員の勤務時間は3パターンあり、8時35分からの勤務（A勤）、10時15分からの勤務（B勤）、11時15分からの勤務（C勤）となっている。全員の教職員が揃う時間帯はC勤開始の11時15分からA勤終了の17時05分までであり、その中で夕方の16時55分から17時05分の10分間を教職員の打ち合わせの時間として確保している。Ⅰ部のチューターであってもB勤やC勤の日は、Ⅰ部の授業が始まる時刻は勤務時間外であり、Ⅱ部のチューターであってもA勤やB勤の日は、Ⅱ部の授業が終わる時刻は勤務時間外になるため、Ⅰ部の朝のSHR、Ⅱ部の帰りのSHRのようなものはない。生徒が職員室にチューターを訪ねて来ても、いつでも会えるという訳ではない。

⑦　給食について

夜間定時制では夜間給食法に基づき夜間給食が行われているが、田尻さくら高校のⅡ部の授業終了は午後7時なので夜間ではないと解釈し、夕間部という名称を用いて夜間給食法の適用を回避している。代わりに、午後5時前後に休憩時間を設定して軽食販売を行っている。

⑧　部活動について

従来からの夜間定時制高校などでは、限られた時間ではあるが部活動が行われており、定時制通信制の体育大会（定通総体）が行われ、夏休みには東京を中心に全国大会も実施されている。しかし基本的に多部制高校では朝から晩まで授業が行われているため放課後の概念がなく、部活動の時間を確保することは難しい。田尻さくら高校では教職員の勤務体制の難しさもあり、部活動は行われておらず高体連にも加盟していない。代わりに、希望する生徒が集まって愛好会を作り、限られた時間と場所の中でバスケットボールや軽音楽、ダンスなどの活動を自主的に行っている。

⑨　校納金について

定時制高校は、経済的な理由により全日制に進学できなかった生徒の受け皿としての役割が大きかった。そのため授業料は安くＰＴＡ会費などの団体費も安く抑え、教科書代は勤労学生に対する教科書給与制度などが実施されてきた。しかし、授業料無償化により安い授業料の恩恵はなくなり、さらに４年で卒業できない生徒は５年目からは授業料が徴収されるなど、かえって学業の継続を諦めさせる要因となっている。団体費については、併置校では全日制との一体の運用のなかで定時制は安く抑えられている例もあるようだが、多部制高校のような独立校の場合は、学校の運営に不可欠の財源として全日制並みの団体費の徴収が行われ、入学時や新年度を迎える時期の経済的負担は大きい。

⑩　社会人と共に学ぶ

他の多部制単位制高校と同様に、社会人聴講生を多数受け入れている。聴講生の数は年々増加し、本年度は１００名近くに及んでいる。学校設定科目である陶芸やハングル、中国語などを中心に複数の講座を受講する熱心な聴講生も多い。

7、最後に

それぞれに異なる、様々な環境の中で生活している生徒達を受け入れてはいる本校ではあるが、入学して来る生徒の３割以上が卒業までたどり着いていない現状は、自慢できる状況とは言えない。さらに、卒業後も不安定な生活の中に置かれている卒業生が多いという現実がある。不登校を経験した生徒たちに対しは、適切なタイミングで背中を押してやることが極めて難しいということを強く感じている。

本校は開校以来入学定員を満たしたことのない学校であり、定員に満たない学校を安易に廃校にしてしまおうとする大阪府のような発想からすれば、すぐに消えてしまう学校である。しかし、生きづらい日々の生活の中に置かれている子ども達に対し、定時制高校は学びの場としての最後のセーフティーネットの役割があることは忘れてはならない。生徒たちには自らの殻に閉じこもることなく、社会生活につながる学校生活を送ってもらいたいと願い、これからも一人一人の生徒に寄り添う、きめ細やかな対応をして行かねばならないと考えている。

（宮城県田尻さくら高等学校）

（編集部注・江草さんに提出レポートを縮めてもらい、タイトルは編集部でつけたものです。レポートを読ませてもらった印象から「わが」とタイトルの頭につけさせていただくことを無理に江草さんにお願いしたのでした。）

新しい教師へのねがい

高橋　金三郎

新しい教師の教育実践の何か助けとなるようにとの編集部のお話しでしたが、考えてみると、これはたいへん書きにくい問題です。

私は大学教師で、いわゆる現場にいませんので、新米であるために実践に何か特別な条件の必要なのかよくわかりません。それに、これは決して皮肉な意味でいうのではありませんが、古い教師がどんどん教育実践をやっているようには思われませんので、新しい教師にだけ実践をすすめる文は非常に書きにくいのです。

「古い教師はどんどん実践しているが、新しい教師は、経験も能力も乏しいのでできない。それで研究能率をあげるために助言するのだ」というのなら、それには私は適任でなく、老練の教師こそふさわしいでしょう。正直のところ、新しい教師の模範たりうるような、よい授業をしている古い教師はそうたくさんはいないでしょう。さればといって、新しい教師の方に希望が持てるというデータも別にありません。授業のよしあしは教職歴に無関係のように思われます。結局、わたしのできることは、いままで教師の実践研究におつきあいして、平常問題を感じていることを書き、その解決と予防策を新しい教師に考えてもらうことだけのようです。

4月は、バスに新しい車掌見習生の乗る季節です。大きな声で、「次は○○です！」といい、「切符をお切らせ願います」と絶えず車内を巡回する彼女たちの紅潮した顔をながめると、これが高校へもいけず先生にあまされた子どもたちかと、思わず肩をたたきたくなるような親しさを感じます。それにひきかえ、古い車掌の態度はどうでしょう。座席にどでんとおしりを落して、乗客をねめまわしたり、見習生のまちがいを嘲笑したり、そのくせ車で混雑したみせばになると、例の「オーライ、オウーライ」などの脳天から出るいやらしい奇声を発するのです。教える立場になると、こんなに人間がいやしくなるのかと、自分自身のカリカチアを見せつけられたようで、実に不快です。

かなり以前の教育実習のときのこと、ある女子学生が5年の担当になりましたが、クラスにひとり口をきかない子どもがいました。彼女はいろいろ努力しましたが、その子はどうしても口をききません。実習も終りになって、彼女もあきらめてしまった。おわかれパーティーの日になったら、どうでしょう、その子どもは歌を歌い、おどりをおどったのでした。あとで聞いたら、その子どもは入学以来口をきいたことは一度もなかったそうです。

それをどうにもしなかった古い先生たちはちゃんと月給をもらっていたのでした。古い車掌と同様に。

女子学生も先生になり、いまでは中堅クラスになっているはずです。新しい車掌見習生とおなじく全力投球であったため、すばらしい教育効果をあげた彼女は、いま、どんな先生になっているでしょうか。

一、「忙しさ」の追放

教師になった卒業生にあうと、「忙しくて忙しくて何もできません。落ち着いたら実践してみたいと思いますから、よろしく。」とあいさつされることがよくあります。そんなはずはありません。新米教師だけが特別に忙しいなどという馬鹿な職場はありえません。それなのに、新米教師の大部分がそのようにいうことは、結局大部分の教師が実践といえるほどの授業をしていないということに

つながるのではないでしょうか。もちろん、教育は多忙です。しかし忙しくない労働なんてものはつまらない仕事のはずです。問題は忙しさの内容ではないでしょうか。「授業」だけでいえば、新兵だって老兵だって忙しさに変わりはないはずです。老兵が暇だとすれば、それは要領よく本質的な仕事をサボっているからであり、新兵が特に忙しいとすれば、それは本質的でない仕事が、何も知らない新兵にかぶさっているからではありませんか。

教材について十分な経験のない新兵が学習に沢山の時間をとられるのはありえましょう。しかし老兵が、教科書の赤本でごまかすのではなくて、自分で教科書の内容を再検討を始めたとしたら、10年や20年でひまになることなどはないはずです。新任したばかりで、分会代表として組合大会に出席させられる教師がいます。そこでは「組合」がどう考えられているのでしょうか。そんな分会で何年もして、ひまになったら実践できるのでしょうか。

誤解しないようにしてほしいのですが、私は別に教師がなまけものだとか、実践しないのはけしからんといっているのではありません。

私のいいたいのは、すぐれた実践を発表する教師はひまなのではなくて、忙しさを克服し、本質的でない仕事への抵抗の中で、「授業」という教師の仕事を追求しているのだということです。「落着いたら、ひまになったら」という考えを、新しい教師はやめてほしいものです。「新兵の忙しさ」のなかには、実は教師の良心と懐疑の精神をまひさせる危険な要素があると同時に、老兵の忘れた、あるいは気のつかない問題が明白にとらえられており、明日の輝しい実践を約束しているのだと私は考えます。

「忙しさ」を大切にしましょう。そしてそのなかから、教師の仕事に本質的でないものをきびしく除きましょう。何時までも若いバスの車掌でいましょう。

二、模倣と創造

「模倣」というとなんだか外聞がわるいのですが、一人の人間がすべてを創造することはできません。私たちは、だれでも、すぐれた先人に学びます。「文化遺産の学習」はある意味では模倣でしょう。美術や音楽で各流派ができ、科学の世界でも種々の学派ができるのはそのためだし、それをわるいことだとは、私は考えていません。問題はしかし、どんなつもりで、だれをまねるかということではないでしょうか。

初めて教壇に立って、うまくいかない教師が大部分でしょう。そして、だれかのまねをして急場をしのぐのも普通のことでしょう。私のおそれるのは、そのとき、教科書会社の赤本の指示に従ったり、月給の高い先生の指示を受けたりすることです。まねをするなら子どもにしたわれる先生、その授業で子どもが活発な先生のまねをしてほしいのです。それは月給の高低には関係ないでしょう。赤本をまねして授業がうまくできるなら、全国の教師のレベルは現在よりうんと高く、そして、もっと平均化しているはずです。それが事実と正反対なのですから、赤本をまねるのは有害無益だとしか思われません。すぐれた教師の授業をまねようではありませんか。

「しかし、わたしの学校は平凡で、そんなりっぱな先生はいない」と考えるならば、それはまちがっています。

どんな学校でも、りっぱな教師はひとりは必ずいるはずだと私は信じます。その先生をどうして探したらよいか、それは子どもに聞きなさい。ひとりひとりの子どもはまちがうかも知れませんが、子ども全体の集団はまちがいません。子ども集団は自分で向上したいのです。すぐれた教師の感化を受けて自分を向上させたいのです。たとえ全部の教師を変えることはできないにしても、何人かの教師をりっぱな教師に向上させることにより、その感化を受けるのです。学校中の子どもの目の向くところ、勉強が喜びであることを教える先生と一日でも早く友だちになってください。あなたは現在、もつとも新しい生徒なのですから。まねるといえば、「教育文化」の読者ならば、きっと民間教育運動の成果をまねることでしょう。国語なら教科研国語部会、数学なら数教協、理科なら科教協の影響を受けた教師がたくさんのすぐれた実践記録を書いていますから、是非まねしてほしいものです。けれどもそれがただ「民間教育運動の

成果だから」というので、まねるのでしたら、それは「教科書会社の出している解説書だから、学年主任のいうことだから」という理由づけとまるっきりおなじではないでしょうか。たしかにそう教えなければならぬと思ったら、まねをしたらよいでしょうが、そうも思わず、何となく進歩的な気がしたりその意図だけに感心したりするのでは、やめた方がよいかも知れません。「走れ、メロス」だの「たわしのみそ汁」のすぐれた実践記録はあります。指導書もあります。それをまねるのは大変結構なことです。けれども、その前提には、やっぱり「走れ、メロス」などの文学そのものに感激していなければならぬことがあると思います。自分の認めないものを子どもに文学として教えることはできないでしょう。そうすると、「走れ、メロス」や「たわしのみそ汁」をそのままねて教えるよりは、自分が本当に感心して読んだものを、すぐれた教師が「走れ、メロス」などを扱ったとおなじ手法で扱うのが、本当の意味のまねではないでしょうか。

ここで模倣が実は創造とつながります。「読みかた教育の理論」を学習するときは、宮沢賢治でも早船ちよでもよい、自分で読んで感激しているものがなくてはならないはずです。それは教師以前の学生時代からの問題でしょうし、それがなかったら、文学教育なんてやらない方がいいと、私は思います。社会についても、理科についてもおなじことがいえるではないでしょうか。

「そんなにいろんな勉強ができるものか。それは机上の空論だ。」という人があるかも知れませんが、私は別にたいしたことを要求している訳ではありません。文学に関心なしに文学は教えられないというあたりまえのことをいっているだけです。

今度は理科の例でいいましょう。私が理科教材について多少でも新しいすぐれた解釈ができたとすれば、それは主として理科に弱い女教師のせいであって、いわゆる指導主事クラスのエキスパート教師からは、ほとんど得るところがありませんでした。これも当然のことです。理科に弱い先生たちは、自作てんびんはどうして水平にならないか、中和はどうしてうまくできないか、コマづくりをうまくするにはどうしたらよいか、私に聞いてきました。そこで頭をしぼった結果は、教師の失敗する箇所はすべて教科書そのものに問題のあることを発見し、適当な解決法を考案できたのでした。

それがベテラン、エキスパートの先生からはついぞ、失敗、疑問が出されてこないのです。授業がうまくいっているはずはありません。教材そのものがまちがっているのですから。つまり理科に弱い先生が、実は創造にもっとも大切な「疑問を持つ、失敗を公開する」という原則を守ったのに、ベテランの先生は守らなかったのでした。どちらが理科の正しさをまね、どちらが本物の理科を創造したのでしょうか。この事実をベテランの先生によく考えてもらいたいものです。新米教師に質問されたとき、ありあわせのいい加減な体験で答えずに、いっしょになって考えてほしいのです。逆に新しい教師の側からいうと、失敗したこと、疑問に思ったことは全部「教育文化」なりなんなりに公開してほしいということです。またその疑問をいっしょに真剣になって考えてくれる先輩でなければ、ものの役には立つまいといえるでしょう。

赤本的知識のないほど、よい創造ができるのだということを、新しい教師は一日も早く知ってほしいと思います。

（宮城教育大学）

（＊「教育文化」第69号、1968年10月発行より転載）

こどもの詩・こどものことば

みやざき　のりお

1

米つき

斎藤文昭（4年）

おとうさんが ふくまくでにゅういんしているので、おじいさんとぼくと、ふたりきりで米をついた。

はつどう機をぼくがうごかした。

米を一ぴょうつきおわったら、はつどう機からゆげがでていた。

「あ、水入れんのわすれた！」と、ぼくが大声でさけんだ。

水をあわてて入れたので、水がどうどうこぼれて、プラグに水がはいってしまった。

ふつうは、「だっだったった」となる音のはつどう機が、「だだだだだ」と音をたてた。

そのとたん、「だん」と音をたてて、ゆっくりとまった。

プラグに、水がうんとはいっていた。

プラグから水をとりだすのに一時間もかかった。

五ひょうつくよていだったのが、三びょうしかつけない。

おじいさんが、がっかりしたような声で、

「ついだのは、二番米だけだったなあ。」

といった。

「らいすう（らいしゅう）のぬず（日）曜日、つうごおんつぁんば（ちゅうごおじさんを）たのんでついてもらうべ。」といった。

「おれで、なんでだめなの。」

ぼくは、あせをふきながら、大きい声でいった。

文昭の父は、まじめなはたらき者だった。朝は自転軍を走らせて汽軍に乗り、長町の工場へ通勤した。田畑の仕事がとしよりだけでは、帰っても体を休める暇がない。夜まで、その仕事はつづいた。その上、消防団のひとりとして、むりに時間をつくってはポンプの点検をおこたらなかった。過労が強い肉体をむしばんでいたのだろう。入院。文昭が、この詩をかいて間もなく、若い父は、その短い一生をおわった。

農家にもテレビがはいり、冷蔵庫もはいった。トラクターも、動力ふん霧機も。だが、中心的な働き手は、通勤者にかわり、出かせぎに家を出ている。残されたものは一そう働き、通勤者も、帰ればまたくわをもって田畑に急ぐというのが実状である。収入はふえた。しかし、それ以上にふえたのが労働である。過労の上の繁栄。文昭の父の死は決して偶然ではない。だから、この文昭の詩も偶然に生まれたのではない。

「現代っ子」ということばがある。だが、子どもたちは、そうかわったのだろうか。この詩は、そのことについてのひとつの解答である。彼は少々やけぱっちになっていたのかも知れない。だが、彼は、一家をささえる一本の柱となって行動し、さらに、より強い柱になろうとしている。文昭は、ややうるんだ目とかわいい唇をもっていた。時に体を女性的にくねらせ、私の大声をあびることがあった。その彼が、ここでは、大きい声で、弱気のとしよりをたしなめ、彼の覚悟をしめしている！働きものであった日本の少年、そのまじめさと、地についた生き方と愛情は、ここに、かわること

なく存在している。

機械文明は、人間性をすりへらすという。だが、そのような変化のなかでも、私たちの子どもたちは、すばらしい人間性を発揮している。道徳教育をおしつけられねばならないのはだれなのか。文昭の詩は、そのおしつけにたいする抗議でもある。「おれで、なんでだめなの」彼の声が、また、私にはきこえてくる。

2

あかちゃん　　ししど　やいつ（2年）

おらいのあかちゃんが
しんでしまった。
きょうがおそうしきです。
かあちゃんがないだ。
ぽくもなみだぽろりとおちた。
そのときかあちゃんが
とう（戸）のかげでないっだ、

子どもの作文や、詩のねうちはどこにあるのだろう。私は、なによりも、子どもたちが、自分の目をとおして、自然や社会の事物・現象をしっかりとつかみとり、それを、みんなの前に提出しているところにあるとみている。しゃれた文学論や、えせ文学者のことばにまよわされてはならない。すぐれた文学作品の第一の資格も、人間や人間のいとなみ（生活現象）を生き生きとえがきだしているところにある。

藤村は、そのことをつぎのようなことばでいっている。

自然主義の時代も既に過ぎ去ったと言はれつつある。何といふ冷静な言葉だろう。吾国の文壇は漸くレアリテエに触れ初めたばかりではないか。吾脩日本人の欠点はほんたうに物に熱しないところにある。今の時にあたって私は一写実家として進んで行くことを恥としない。（飯倉たより）

私たちは、子どもに、何よりも、生活の事実をきりとることを要求しなければならない。そして、そのことは、そのまま、文学創作の基礎的な作業だといってよい。生活を観察せず、現実をみることをしない作家にどうして文学がえがけるであろうか。

やいつの詩を語ることをわすれたのではない。やいつの詩が、私たちに色々なことを教えてくれているのは、やいつの詩も私たちの前に生活の事実を提出しているからである。

やいつは、幼い生命を失ったことによって泣いている母親をとらえた。そして、その母親が戸のかげで泣いていたことをとらえた。幼い生命を失ったことは悲しい。だが、その悲しみを「とう」のかげでなかねばならないことはさらに悲しい。そこには、まだ、封建的な家族制度や部落のしきたりにしばられている農村婦人のすがたがある。やいつは「とう」のかげでとかいている。これを、かんたんに「と」（戸）とかきなおすことはできない。「とうのかげで」というひびきには、母親の上にのしかかっているものの重ささえ表現されているようである。やいつは、生活の事実をかいた。そのことで、私たちは、戦後おいても、あまり変ることのない農村婦人のすがたをみることができるのである。

第二に、私たちは、やいつの詩によって人間は、どのようにして人間になるのかということを知ることができる。わけても、人間の感情は、どのようにして発達するかということを知ることができる。人間の感情とか情緒、価値観というようなものは、先天的なものであり、教えられないものだとする人がある。文学教育でも、文学は、しょせん、ひとりで読むよりほかにないものだとするもっともらしい論がある。

だが、事実はちがう。やいつもないた。ぽろりと涙がおちるまで悲しくなった。だが、その涙は「とう」のかげでないている母親のすがたによってひきおこされた感情であることをしめしている。もちろん、母親はやいつに泣けと教えているわけではない。だが、母親のすがたは、無意識であっても、人間は、何をかなしむべきかをやいつに教えているのである。やいつはそのことによって、人間の感情に一だんと目ざめたのである。（中野重治の「梨の花」をぜひ読まれたい。あの中には、人間の感情や価値観が社会的なものとしてどう形成されて

いくかが見事にえがきだされている）

3

しんけんな人　　しみず やすひろ

そろばんの時、しんけんな人がいた。
目をじっとあけている。
よくみたら、
まつげのところに
なみだのような、あせがたまっている。
そして、口もきかない。
ぼくは、
なんだか、
さみしいところに きたなあと思った。

「いま政府が出してきている高校の多様化……ああいう多様化は将来のあり方とまったく逆行するものであり、失業者予備軍をつくるだけだと思っている。これからの人間は高度の判断力を持った、機械とはひじょうに隔った人間にならなければならないのであって、そうでなければ仕事がなくなってしまうと思う。社会主義になれば高度の社会保障が発達するだろうから飢死はしないが、能力のない人は生きがいのない一生を終ることになる。」「ひじょうに卑近な目標とか現実的な目標といわれているものが、純粋なほんとうの教育の目標にだんだん接近する傾向もある。企業側が善意を持ってそんなことをやっているわけではない。発展のロジックそのものから、たいていのものは機械がやるようになるから、人間が機械になってはだめなので、人間が人間でなければ、人間の企業的価値すらなくなるという傾向が少しずつ見えてきている。」

これらのことばは「教育目的追求のために」『教育』二月号という座談会での遠山啓先生（数学教育協議会）の発言である。「ひじょうに卑近な」実用主義的な立場からも「人間が人間でなければ」ならないという要求がだされてくるという時代に私たちは立っているわけである。この座談会はそのことを、私にもよくわからせてくれたのであるが、そのとき、私には、この詩がイメージとしてあったのだ。

やすひろは、そろばんの塾にいった。そして、「しんけんな人」をみた。まつげに「なみだのような、あせをため、「目をじっとあけている」。その、「しんけんな人」を見て、やすひろは「なんだか、さみしいところにきたなあ」と感じたのである。この感じ方はまったく正しい。それは、社会的・歴史的な正しさである。

そこでは、「しんけんな人」がその「しんけん」さにもかかわらず、機械に（または、その一部に）されているのである。人間であることをうばわれようとしているのである。これ以上の「さみしい」世界があるだろうか。やすひろの目は、現実の教育が、社会の歴史的な発展にとりのこされて、非人間的な動きにとどまっていることの恐ろしさを明確にとらえている。

私は、ここで、あえて、塾教育を非難しているのではない。子どもをそこに追いやっている責任は、おそらく、私たちのたずさわっている公教育にあると、私は感じているからである。私たちにもあせりがある。子どもを十分に育てられないあせりは、せめて、ひとつだけでも、なんとか身につけて、どうにか生きていけるようにしたいと考えてしまう。子どもの全面的発達ということをわすれ、ひとつのことをたたきこもうとしたくなる。子どもというものを機械の一部にもしたくなる。さびしいところにおしこめたくなる。おそろしいことだ。こんなおそろしさをあえてやろうと考えるとき、私は、そのたびにこの詩を読まねばならないといまは思っている。

（柴田・船岡小）

（＊「教育文化」70号1968年、72号1969年、73号1969年より転載）

船越だより

佐々木　清

創立1873年という船越小学校は、震災による統廃合で、この4月閉校になりました。かつての船越小はどんなところだったのでしょう。
1986年1月と1987年1月の2回にわたって、宮城民教連機関誌「カマラード」に載った佐々木さんの「船越だより」で、20数年前の船越をお知らせしたく転載します。ただし、ページの関係で抜粋したカマラードの一部になります。

赴任　4月5日（金）

私の家は、登米郡迫町佐沼にある。登米郡の過員解消に協力するために、3年ほど他管区へ転任してくれないかという話は、3年前からあった。異動の時期になって同じことを言われつづけるのもいやなので、今年は動くことにした。

どうせ遠方に行くのなら、思いきってひとがいやがる遠くへ行こうと考えた。でも私には島は耐えられない。陸続きであるならばどこでもよいと考えた。

この日は、家内と末娘（六年）を連れて赴任した。いわゆる「単身赴任」になるのだから、どんな所かを知っておいてもらいたかったし、きちんと挨拶をしておきたいと思ったからである。

地図でみると、ちっぽけな峠をいくつか越える。しかし、峠道はヘアピンカーブが多く、運転していてもハンドルに力が入る。乗っているだけでも、左右に揺られて体にはきつい。末娘は峠で酔いかげんになってしまった。

2時間ほどで、新しい任地に着いた。リアス式海岸の、風光明媚な、小さな漁村である。戸数は150。人の数は700。

学校は、昨年3月にできあがったばかりのピカピカ校舎である。暖房設備も、電気設備も、すべて集中管理方式らしく、職員室奥の配電盤やスイッチボックスがにらんでいるような気がした。

学年は全部一組ずつ。それに4年までは10人前後である。私にとっては小さな小さな学校で、学校らしいなあと感じた。分校が二つあるべき地である。

三陸の漁村がどこでも家々の屋根がくっついているように、ここでも、ひと様の軒先を通路にしている家はめずらしくない。それでも、すぐそばに、郵便局がある。駐在所もあるのだ。心づよい。

校長室に案内された。家内と娘もいっしょに挨拶した。校長室には、PTA役員三役がそろって待っていてくれて、紹介された。とはいえ、鋭く観察されている眼を意識した。担任は3年生。

昼食は、用務員のおばさんの手作りカレーライスをいただいた。この浜には、食堂などはいっさいないから、来客に昼食を出す時には、すべて手料理になるのだそうだ。それにしてもありがたいことだ。家族まで一緒にいただくなんて。用務員のおばさんの眼が、やさしく笑っていた。

街頭指導　4月12日（金）

春の交通安全運動がはじまっている。今朝の街頭指導は、私の当番である。強い北風が吹き、海岸は傘をさして立ってはいられない。本校94名のうち、分校を卒業した5・6年生と、一つだけ隣りの浜の子20名は、歩いて40分ほどはかかる。こんな荒れた日は車で送られてくる。ほとんどは、学校のすぐ近く、歩いても5分以内のところから通ってくる。

道路は、峠から浜に下る二つの道がある。一つはバスが下りてくる。車がらくにすれちがえる道は一つもない。浜の道路は、家々の間をやっと車が通れる幅でしかない。車の量はうんと少ない。それにしても、地区の婦人会の人々までも街頭に立って子どもたちの歩き方を指導しているのはこっけいだ。安心して歩ける道、安心して学校に通える道は、もう日本列島にはないのだなと実感した。駐在所のおまわりさんも7時になるとパトカーで出動、スピーカーで交通安全をよびかけている。

カンパ　4月17日（水）

住宅は、二階づくりで8室あって、現在は満室である。男4人、女4人。男はみんな民家で朝夕の食事をお世話になっている。女性はさすが、がんばって自炊をしている。台所の設備も、2室に一つの割で整っている。だれいうとなく、「マンション」と呼んでいる。

隣りの学校の、いや町内の七つの学校の教員共同住宅を、「マンション」と

呼んでいるようだ。私には耳なれない言葉で、なじめない言葉である。

今夜は、石巻のカラオケバーにいって楽しんでくると、私をのぞいた3人はそわそわしていた。新任は2人で、初月給をまだもらっていない。先輩づらをして、3000円カンパした。やっとガソリン代になる程度だろう。

宿題　4月22日（月）

今日と明日の2日間は家庭訪問だ。一日6人だ。移動にかかる時間がほとんどないのでらくである。どのお母さんにも言われたことは、「去年のように宿題を出して欲しい。そうでないと家でさっぱり勉強しないんだってば」と。小3の子は、うんと遊ばせたいと思う。宿題は出しませんからと答えて歩く。

アット・ホーム　4月23日（火）

分校主任の千葉先生は、末娘さんを連れ、奥さんを連れてきている。6年生だ。担任の坂本さんの家庭訪問を夜にしてあって、ついでにつごうのよい人を呼んで、いっぱいやろうという段どりだった。

6時ごろに5人がおじゃました。こうやの教員住宅には、奥さんの手料理が並べられていた。久々のアット・ホームに招かれた思いでうれしくなった。

娘さんが4年の時に転任してきた。娘さんを転任前に浜へつれてきて、「どうだ、この海でいっぱい泳げるんだぞ」と話したら、転校することをオーケーしたという。「娘に助けられたってば」と言ってたのが印象的だった。もし、娘さんがいやだと言えば、単身赴任になってしまったのだろう。家族が浜に住み、浜の人々にすっかりとけこんでいる様子は、話の中にふんだんにでてきた。うらやましいかぎりだった。

分校の住宅から部屋にもどってきたのは10時だった。思いがけず、浜のスピーカーが鳴りだした。

祭り　5月14日（火）

立浜分校の学区にある北野神社の祭典だ。分校は4校時限。浜をあげてのお祭りだ。午後、学校長も挨拶に出かけた。放課後の行事は何もない。私たちも子どもを帰した後で祭りを見に行くことにした。

夕方で、神社にはのぼりが立ち、供物が上げられてあるが、人は一人もいない。長い石段を3人でのぼり、かたちばかり拝礼。宮守の家の方から、笛や太鼓の音がきこえてくる。広い庭にはみこしがおかれ、舞台では神楽がたけなわだ。背広を着ていた私たちは、やっぱり目立つ。宮守の家にあげられた。分校主任の先生が私たちを紹介してくれた。お酒が運ばれてきた。宴はほとんど終わっていた様子。しかし、私たちの分のおぜんもすえられた。その歓待に感激した。

「浜はね、地区も学校もこうしてひとつになってやるんですよ。子どもがいなくても全戸がＰＴＡ会員になっているんです」

分校主任の千葉先生は、今日の祭りがほんとうに楽しそうに土地の説明をしてくれる。おぜんには、アワビやウニがのっている。めずらしそうに、私はおいしくいただいた。

「先生、日記書いてくるよ」　5月15日（水）

4時から、地区の歓迎会が「憩いの家」である。めずらしく、3時から4時までは暇ができた。今は、春の野山のまっさかりだ。荒浜まで山道を歩いて帰る俊彦君を送りながら、クラスのみんなでハイキングすることにした。「3時に玄関前集合だよ」と言って帰す。みんな家にカバンをおいて集まってきた。

子どもたちは、私といっしょに山道を歩くことがよほどうれしいらしい。

「あそこに、ぼくたちの基地をつくったことがあるんだよ」

先に行っていた子が、死んだモグラをつかまえて見せにもきた。

「先生、ぼく帰ったら、今日のこと日記に書くよ」

と好博君が言った。日記は、書いて先生に読んでもらいたい人だけが提出することにしていたのだった。

月曜日に学校にきて、土曜日にすぐに家に帰る生活をしていたのでは、子どもたちといっしょに遊ぶチャンスがほとんどないではないか。ふと、そんな不安を感じた。

地区歓迎会

ＰＴＡの歓迎会とはちがうのだ。本校のある学区民が催すものなのだ。分校学区民の歓迎会も、もちろん別に開かれるのだ。地区の総代さんを筆頭に、水産部長・森林部長・ワカメ部長等の実力派が、にこにこして接待してくれた。大きなウニ・アワビは、このために採ってきたそうである。

2次会は、歓迎会場のすぐ屋根続きの教員住宅の私の部屋。地区会計の高槻さんもまじってくれた。「ここはいいとこ、いい人たちだからね」と、にこにこしてさかんに強調して言った。

「先生方、ごくろうさんでした」　5月26日（日）

運動会だ。きのうは、山もかすむほ

ど強い雨が降り続け、校庭を水が流れていた。3時ごろ、それでも小降りになったのをみはからって、ＰＴＡの協力もいただきながら準備をした。あとは奇跡を待つしかない。テレビの予報でも、明日も雨は降り続けるという。私は、明日は雨のために運動会はできないと信じて床についた。

ところが、明け方の4時半に、枕元のガラス戸を叩く音で目がさめた。外はシーンとして明るい。だれだろう、こんな時間にといぶかりながら戸を開けた。

「先生、空見だすか」とＰＴＡ会長の牧野さんだった。部屋の戸をあけても空はあまり見えない。しかし、私はとっさに、「見すたっちゃあ」と答えた。

会長さんは、真夜中に起きて空を見、そして風の向きを知ったそうだ。風の向きは大きく変わった。だから晴れるとよみ、朝を待ったという。私以上に天候を心配してくれていたのだった。私は恥ずかしくなってしまった。すぐに学校へ行く。

校庭の観覧席には、カーペットを敷いて陣とりしている人たちがなん人もいた。今日は、浜をあげての大行事なのだという実感がわいてきた。幸い水はけがよいので、グランドには用意しておいた川砂を少々まいて、日程は予定通り、しかも風もなく、すばらしい青空の下で実施できた。四時ごろ、ＰＴＡ主催の「慰労会」が、住宅となりの憩いの家でもたれた。開会の挨拶で牧野ＰＴＡ会長さんは「先生方、すばらしい運動会をみせていただき、ほんとうにごくろうさまでした」と語った。運動会が終わり、職員クラブ主催の慰労会は毎年参加してきたが、ＰＴＡ主催で、しかも地区の役職の方々も出席して「先生方、ごくろうさんでした」と言われたのは、私にとっては初めてであった。

フノリ　5月27日（月）

27日は土曜タイム、28日は代休であった。余裕が出てきたのか、12時半出発で荒浜まで歩くことにした。一時間近くかかる浜だ。12人のクラスの子どもは、一人をのぞいて11人集まった。子どもが、先生と一緒に荒浜まで遊びに行ってくるよ、と言ったことを信用しかねてか、2人の母親が学校の玄関まで見送り（?）にきた。途中までは一度歩いた山道だ。マムシグサがいっぱい道のそばの杉林の中に咲いているのが目についた。じっとりと汗ばんでくる。

クラスの俊彦君や、1年生の女の子3人をふくめ、11人がこの山道を毎日往復しているのかと思うと、この子どもたちにたいする尊敬の気持ちがわきあがってきた。

荒についた。そして「甲島へ行ってみよう」と私がさそった。子どもたちは喜んでついてきた。

甲島は荒の砂浜から50メートルほどつきでたちっぽけな島だ。そこの三畳紀の粘板岩からは、昭和57年にギョリュウが発見されている。北大と国立科学博物館で目下研究中の貴重な化石である。俊彦君の案内で甲島に渡り、化石を発掘した場所をみた。ちょうど干潮時でごろごろした丸い石の上を渡っていくことができた。岩には、フノリやマツモがいっぱいついている。私は、子どもたちにもフノリとマツモをとるようによびかけた。珍しいのは私だけなのであろう。子どもたちにとっては、マツモやフノリには何の関心もないのであろう。私は夕方、家にもって帰った。マツモはゆでて酢じょう油をかけて食べる。翌朝は、フノリ汁にしておいしく食べた。

マンボウ　7月11日（木）

朝8時、用務員の牧野さんに、「けさ、マンボウが入ったので、学校の水槽に入れて、子どもたちに見せてください」と言われた。ありがたいことだ。でも、ざんねん。大型水槽はひびが入って使えないのだ。牧野さんは、「私があとで、一輪車につんでもってくっから」とすごいファイトを見せてくれた。

一時間目が終わった。思いがけず校内放送で「マンボウが屋体下の駐車場にきましたので、全校生徒は先生といっしょに見て下さい」という。さっそくクラスの子12人と下りていった。おどろくなかれ、ワカメを入れる箱の中に海水を入れ、マンボウを積みこんでもってきたのだ。マンボウは身動きひとつできたものではない。大切にされ、名前までついている松島水族館のマンボウを知っているだけに、「かわいそうな」という気が一瞬した。

マンボウの体にさわってみる。すごくかたい。手はやっぱり魚くさくて、あとで石けんで洗ってもなかなかにおいはとれなかった。

背びれは箱の上に出ている。時々、左右に動かす。エラは周期的に開く。小さなエラだ。運動量が少ないせいなのだろう。マンボウの口をみたさに、水の中からマンボウをもちあげてみた。すると、口から二回水をはきだした。「あっ、水でっぽうだ」と佑記君がさけんだ。喜一君は、まあるく奥深い口の中に人さし指を入れた。歯はみあたらない。

船越の湾でも、定置網をかけている

人がいる。時々マンボウが入り、市場に水あげされる。海の表面に昼ねをするがごとく横になっているのを見かけることもあり、ヤスでついていることもあるという。白身で、イカサシよりもやわらかい。冷凍しておいたのを酢じょうゆで食べるとうまい。

クラス旅行　7月28日（日）

3年生12人だけのクラス担任である。私はきた時から、佐沼の夏祭りを見せに、我が家につれていって一泊させようと考えていた。この子どもたちなら、うんと喜ぶはずだし、今ならそれができると考えた。

経費はなにもかからない。輸送だって、乗用車が3台あればよい。親の協力は喜んでしてもらえるはずだ。我が家に泊まるのだって夏なら大丈夫だ。学校長にも話し、了解をえた。終業式の日、子どもたちには口頭で日程を説明した。みんな大喜びだった。しかし、12人中3人は行けなかった。

9時半に玄関前を出発する。お母さんたちはさまざまな磯物をもって、見送りにきた。私の車に4人、秀洋君のお父さんの車に5人乗った。秀洋君のお父さんは、けさウニとりがあり、早起きしたのでねむそうであった。

10時半、登米町に着。明治の小学校の廊下を子どもたちは喜んで歩いた。はだしで。11時半、自宅に着く。そば屋につれて行きたいと考えていたが、夕べお母さんたちが海岸に集まっていろいろ相談し、みんな弁当をもってきたのだった。さっそく昼食にする。12時半、家を出て、ぞろぞろと町を歩く。

4時、家でひと休みさせて、ザリガニ釣りにいく。竹にもめん糸を結び、その先ににぼしをつけた。3人に1本の竿だ。子どもたちははじめてのことで、釣れるたんびに大声を上げている。はじめこわがっていた子も、ザリガニを釣り、釣ったザリガニは自分の手でバケツに入れられるようになった。よほどおもしろいのか、やめようとはしない。

7時、夕食後、迫川の土手に向かう。8時から川原で花火が打ち上げられるのだ。

花火が上がる。もちろん夢中になって見ていた。花火は9時に終わった。人ごみ、車ごみの中、気をつかいながら自宅にもどる。さっそく風呂に入れて、床につかせる。「10時にはシーンとなれよ」と声をかけた。私はホッとしながらビールを飲み子どもたちが眠るのを待っていた。今、どんなことを考えているのだろう。船越の家のことかな。遠く船に乗っている父親のことかな。

翌朝6時に起床。ひとりひとり、自分のふとんをたたませる。近くでやっているラジオ体操につれていく。朝食後、9時半に迎えのワゴン車がきた。

船越天王山の祭り　8月1日（木）

寒冷地手当の支給日で、どこの学校でも出勤日の日だ。船越小学校も同じだ。午前中には、一学期間の各種校外研修会で学んだことを伝講する会が予定されていた。

朝早くから、浜のスピーカーを通して笛や太鼓が鳴りひびいている。海の安全を祈願する祭りで、学校長には宮寺より案内が入っている。それに、しばらくとだえていた子どもみこしを復活させたいものだと、PTAの役員さんたちもかけずりまわっていた。29日の夜には屋体で、たるを花で飾る作業もしていた。年に一度の祭りは、住む人の数が少ないことと、他から見にくる人がいるわけでもないので「にぎやかだ」とはいえない。むしろ、私には、祭りとはいえ、集まる人の少なさに、寂しい思いさえ感じるものである。けれどやっぱり、浜にとっては昔からの祭りだ。浜のだれもが、今日一日をたのしみたいにちがいない。

校長と教頭は、朝から校長室で話しこんでいた。そして、私たちに伝えられたことは、「今日の伝講会は延期します。一日ゆっくり浜のお祭りを見て下さい。」ということであった。

浜の11人衆がもくもくとかつぐ本物のみこし。その前を、にこにことねり歩く子どもみこし。お祝いは、当然子どもみこしの方に集中していた。子どもたちも、はりきって、浜のすみずみまで、ワッショィワッショィとねり歩いていた。夕方には、PTA会長の牧野さん宅に、みんなで招待され、祭りの宵を楽しんだ。

宮城の教育遺産 7

仲間

鈴木道太

冷害凶作という一つの社会現象は、教育の方向にも、村人の生活にも、子どもの考え方にも大きな影響を与えていったのである。

この頃から、月二十銭の授業料（高等科は義務教育でないという理由で、村役場では、申訳的な授業料を毎月徴集していた）が未納になり、毎月のように役場の係が学校に来て未納の子の納税の切符を置いて行った。

吏員の置いていった切符を教室で渡すのは私にも苦痛だった。どうしてこの授業料を心よく家から貰って来るかについては、子どもらにもいろいろと工夫の要ることだった。

授業料

半沢　磨

学校を帰るとおれはすぐ草刈いしょ（着物）に着換えて、おそくとも、早くとも、二束から三束の草を刈って来るのである。

それは授業料を貰うためである。ただくれろというと顔よくはくれられないから、少し目立つように働いてからくれろというと、仕方がないからくれられる、という考えが、いつもおれの頭をはなれないのである。

ぶよに喰われるのも忘れて、一生けんめいになって刈っている。その刈っている時考える。うんと夏休のうちは働いたし、朝は草刈っていき、みんな草刈しない晩方も刈ったから、くれられるとは思うが、また一方反対を考えると八百屋（野菜もの）は駄目だし、借金も払わなくてはならない。十日ばかり前も米を借りて来た。それがなくなった。また肥料も借りて来なくてはならない、二俵借りるには前の一俵の代は払わなくてはならない。

こんな具合に子どもは苦労しているのである。二十銭の授業料を、父母から顔よく貰うというために、目立った働きをしなければならないと考えているのである。こういう現実のなかで、子どもたちの生活の必要をみたし、子どもたちの生活をたかめていくという教育は一体なにか。

夏の講習会の終ったあと、私は国分一太郎と二人で、北五十人町の菊池譲の四畳半で、何度も北方教育について話し合った。文部省の画一的な天下り教育が、決して地域の生活必要をみたす教育でないことは明かである。それならば、本当にこの北方の地域に生きている、北方の子どもの幸福のための教育は一体なにか。

作文「立見」を書いて不当に高い年貢のために悔んでいる子ども、授業を休んで救済工事の土方に出て授業料や教育費用を賄おうと考えている子ども。二十銭の授業料のために、人一倍の労働強化を苦労としていない子ども、この子どもらのための真実の教育は、国定教科書に書いてある「農業は一家和楽の職業であるとか、健康で趣味に富んだ職業である」などというお説教ではない。

一九三四年の十月の末、私は国分一太郎と何度かの文通のあとで、東北六県の仲間に案内状を出した。福島からは木下竜二が、山形の国分一太郎と、秋田からはじめて、佐々木昂と加藤周四郎が来た。岩手と青森にも出したが、誰も来なかったのは「北方性教育」に対する認識がまだそれほどの成熟はしていなかったためであろう。

宮城は私の他に国語土曜会以来の定連があらかた集った外に菊池譲が参加した。

仙台の紅屋喫茶店を会場として、この集りを「北日本国語教育連盟」の結成準備会とし北方性教育に関する一応のテーゼを私が起草し、それをプリ

ントにして各県の代表者から意見を求めることにした。私の出していた「綴方評論」の「綴方教育に於ける北方性と地方性」の特集がそれであり、このメンバーの外に岩手から永沢一明が意見をよせた。

紅屋の会場では、木下竜二と国分一太郎の間に激しい論争があった。当時木下竜二は、千葉春雄の恩顧を受けることが深く、六県を中心とする独自の文化運動がおこれば、千葉春雄の「全日本綴方倶楽部」にも影響を及ぼし「綴方倶楽部」の売行が減って、東宛書房の商業ジャーナリズムに打撃を与えることを怖れたのである。全日本綴方倶楽部は、全国の綴方人のクラブであって、秋田をのぞいて、私たちもその支部ということになっていたのである。

しかし、と国分一太郎が反駁した。われわれが若し、この全国的な綴方文化運動に貢献することが出来るとすれば、全国的な地方でジャーナリズムの支配のもとに、その規格に合うような作品を提供することではない。北方の地帯に芽生えた、そして北方の独自性に立つ作品活動をすることによって、はじめて全日本の綴方文化の正常な発展に寄与するのであるという主張であった。

木下竜二はこれを了解した。討論の最初には感情も加わったが、論争の間に洗い流され、意見が意見を屈服した。快よい昂奮であった。北方の地帯は、気候風土に恵まれず、そのために生産もあがらず、文化も遅れている暗い谷間であるという。それが東北を規定する通念であった。もちろん、それも否定は出来ない。しかし、これだけでは俗論であって、根本的なものをおき忘れている。

たとえば今度の冷害凶作も、海流の影響で奥羽山脈の東部、太平洋岸一帯に、特に稲の発育にもっとも必要な七月の中旬から九月の上旬まで霧雨が続き、日照時の不足がこの惨害となったのであるが、これと同時に東北地方が二毛作を不可能とする地理的条件のなかで、五反以下の零細農が多く、しかも封建的な高率小作料のなかで土壌を改良する余裕がなく、耕地は全く抵抗力を失っていたという事実を忘れてはならない。

冷害という条件が加わっていたとしても、もしも土壌に充分な肥料を与え、不順な気候に対する抵抗力を持っていれば、これほどの惨害は受けなかったに違いない。二百年間に七十二回という凶作飢餓は、以上のような社会的条件を考慮に入れなければ説明が出来ないのである。これに対する政府の指導が、単に品種の改良によって、寒冷地に適する水稲品種を研究するというだけでは根本的な対策とは言われない。

海外諸国における資本主義の側圧と、国内における生産力の発展とは、明治維新を契機とする変革となり、幕府の滅亡と明治新政府の誕生となったが、この場合においても北方はいまだに封鎖的な土地経済の段階にあって、減亡するものの側につき、明治新政府に驥足を伸ばすものがなかったから七十年の歴史を通じていつも被支配者の立場にあった。

北方の暗い谷間は実にこのような、地理的、社会的、政治的条件の組合せによって生れたものである。

だがそれだけに北方の民は踏まれても、蹴られても執拗に生き続ける雑草のような生活力を持っている。忍従、はやいあきらめ、それらは北方人がこの社会のなかで生きていく知恵として、ひとりでに身につけたものである。

名子制度のような奴隷制小作制度が、農地改革の直前まで行なわれている封建的社会、土地経済の遺制である若者衆の「寝部屋」が、現に私の赴任した一九二八年に生きている社会、沿岸漁村には今日においても貰い子による家内労働力の補充が一般的な慣習となっている社会。それが北方の社会である。

貧困と窮乏、人身売買、全国における売娼婦生産の貯水池は東北であると言われている社会。ここは極度にひくい文化と、農業生産力の発展においては「東北段階」という、機械力と畜力よりも、人間の労働力を最高度に強化することによって生存するために名づけられている地帯である。

「病気」の綴方には、いかに加持祈祷が圧倒的に登場して来ることか。

母の耳　　小野　寿男

母はどうしたことか晩方になると、しかめつらをする。ある晩方聞いて見た。

「どこが痛えのげ」と釜の火を焚きながら聞いたら「頭いでえ」とがおって（弱って）いる。
あまり痛くなるのでみこさんを父がよばって来て拝んで貰った。それはお盆の頃のことであった。おらいさ来たみこさんは
母に
「年はたんぼ？」と聞いた。
母は
「四十でがす」といって台所にいそいで行った。おれは縁側で見ていた。
みこさんがよみはじめた。つづけてよむので何がなんだかわからなかったが、黙って聞いていたら
「四人の人を助け給え」と少し聞えた。
次の日は晩方になっても痛い様子がないので「治ったのげわ」と聞いたら
「頭治ったげんとも耳痛くなった」といってそばにあった新聞紙を紙よりにして耳に入れてやった。おれは黙って見ていた。
そしたら水がくっつかって来た。おれは
「耳だれになったんだ」と思った。それから毎日紙よりにして耳の水をとっている。
日曜日のひる頃
「毒だみもらって来てげろ」とおれがひよっこをみていたら言われた。そしてすぐお安さん家さ行ってもらって来た。
その葉をつけるのであるが、葉が大へんくさい。家に持って来ると葉を一つ一つもいで耳の根元にもんでそのつよ（汁）をつけた。
母は一生けんめいになって笠をあんでいる。晩方になるとまた葉をもんでつよをつける。
「何して取っけんの」何げなく聞いたら
「熱あって。直ぐに乾いてしゃねまず（こまるのよ）」と首を曲げてつけている。
こうして毎日笠をあんでいる母親である。お客さまが来る毎に、話が聞えないから黙って「笠あみ」している母親であり、そして毎晩「おれの耳さっぱり聞えね」といろりにあたって笠あみを続ける寿男の母親である。
頭の痛みはじめた、耳だれの出はじめた中耳炎の初期に、なぜ医者にかかって治療しないかと不審に思う人は、小野寿男の家の生活の実情を知らないからである。

お祖母さんの目

小野　武次

お祖母さんはおれの母の母で本家にいる。六十四です。此頃三月ばかり前から目が悪くなりました。毎日神信心して子守ぐらいするが、多くは寝ている。少しよくなると
「このごろ目いいがら遊びに来た」などと言って来ることもあるが、此頃は来なくなった。行って見ると耳は悪くないから、足音や何かで人の来たことがわかる。おれが、がきめ（子ども）らと話して縁側に来ると、こっちを見て、
「武次か」といっている。「うん」と言ってだまっていると
「がきめらもいだの拾って来た。けっからホレ」と言って、たもとから柿四つばかり呉れられた。
朝と夜は祈るのか、ローソクを立て、紙に絵を画いたものをたなにはり、あとは弘法大師のような、小さなものをそこに下げて拝んでいる。拍子木のような四角な木を祈りとともに「カタ、カタ、カタ」と拍子を合せるように声を合せる。拝むたんびにつら（顔）を洗っては祈っている。

したがって北方性教育とは、この封建的遺制からの解放を目標とするものでなければならない。生産力の発展による労力強化からの解放、人が人を支配する奴隷的圧迫からの解放、この解放のてだてを教える教育、それこそが北方の教育である。
そのためには、北方人の持っている強烈な野性を発条にして、生活の意欲を培い、高い逞しい生活の文化を築き上げることである。観念的な知識の堆積でもなく、小賢しい概念の習得でもなく、肉体化した具体的な文化の建設。所謂この生活台の上に立って、生活を学び、生活をたかめていく意欲的な文化を、即ち、骨の髄まで「勤労生活者の精神」を身につけさせる教育こそ、が、北方地帯における生活的必要をみたす教育である。
いく度かの論争によって私たちの結論となった「北日本国語教育連盟」の北方性教育とは実にこの

ようなものであった。

遊びも生活であり、労働も生活であるという平板な生活教育論に対して、私たちの主張したものは「しかし、その中核は生産の生活であり」生産をコアとして、すべての生活現象を有機的に統一するという生活教育論であった。

働く生活から学ばせる、これが私たちの課題になった。働きのなかから愛情も、喜びも、嘆きも、怒りも、悲しみも学ばせる。生活知性と言った場合、それは働く生活を通して、労働を計画し組織するための知性である。

汽笛　　四年男

あの汽笛
田圃に聞えただろう。
もうあばァ帰るよ
八重蔵泣くなよ。

これが北方の詩であると、国分一太郎が秋田の四年の男の子の汽笛の詩を、紅屋の座談会で提示した時、私は感動で戦慄したものだった。泣きやまぬ背中の子をあやしながら、父とその母との労働に力をあわせている北方の労働生活が叫び上げるロマン。

私たちは、詩は叫びであるといい、父と母と兄弟と馬と、一体となっている世界のなかから、意欲的な野性を、喜びと悲しみと嘆きとを叫ばせた。

秋うち　　小山　真

おれと昭寿が
麦をふんでいる
父は田圃で秋うちしている
もう日が暮れた
あきたわと昭寿がいった
おれよりも
馬はなお疲れているべに

月夜の馬小屋　　斎藤　益男

兄が便所にいった
おれも外に出て行ったっけ（行ったら）
兄はおれに
馬にものかせろといった
「あんまりさくず（米ぬか）すっこだァねえぞ」
（ふることはないぞ）
おれは聞えねぶりして（聞えないふりをして）
「馬畜生、今日は疲れたべがら　常よりもよげいまぜでかせっかんな（食べさせるからな）、畜生」
月が照っている
馬は鼻でふふふと鳴く
釣ががちゃがちゃと鳴り
馬は馬小屋をまわっている

晩秋から忘れたような快晴が続いた。窓から見えるお背原山が紅く色づいて、青い空の背景に燃えるようにくっきり浮んでいるのは美しい。だが、カサカサと突立っている稲田の何という色さめたやせ方であろうか。

正宗白鳥が「日本では秋の季節が一番美しい」と文芸の随筆のなかに秋の礼賛をしている文をよんで私は腹が立って来た。その頃の日本において、小作百姓は決して秋の美しさを手放しでは喜べぬ感情があったのである。稔りの秋、豊作の秋でさえ、どうしたたらば年貢を安く負けてくれるか、肥料の借金を返せるかに頭を痛めていたのである。

貧しいということ、貧しさを恥じる心、私はその卑屈をとりさりたいと思った。そして荒浜でやった無計画な生産の教育を、もっと計画的組織的に学習につながる生産教育にしたいと考えていた。

この生産教育は、この過程のなかで、子どもたちの貧乏への卑屈はだんだんととり去られていた。

（「鈴木道太著作選1」より転載）